

令和5年10月8日 名阪近鉄カッコーツアーで兵庫県篠山城を見学

篠山城は、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が、慶長14年（1609）豊臣氏の居城である大坂城の包囲と、豊臣家のゆかりの西日本の諸大名を抑える拠点とするために篠山盆地に築いた城です。

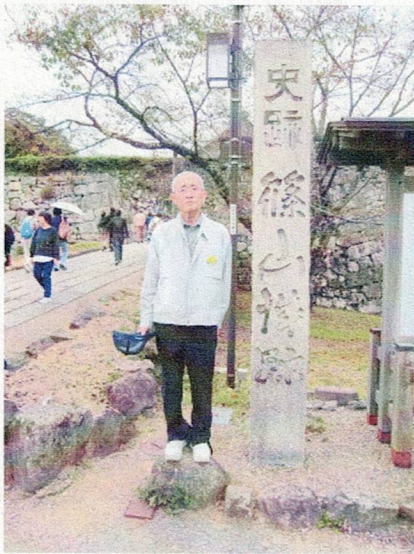
築城工事は西日本の15ヶ国20諸侯の大名に夫役を命じた天下普請で行われ、縄張奉行の藤堂高虎（三重県津城主）、普請奉行の池田輝政（兵庫県姫路市城主）らが指揮を執り、突貫工事により僅か1年足らずで完成した。ただし、天守閣は家康の命令で築かれていません。

城は内堀と外堀を有し、内堀内に本丸と二の丸を設ける。外堀の外周は1辺約400mのほぼ正方形で、東・北・南の門には馬出を設置して守りを固めていた。二の丸を囲む土塀は所々、屏風折りに外側に突き出しており狭間の死角を少なくする工夫がされていた。

初代城主として家康の実子といわれる松平康茂が八上城から移り、松平三家8代と青山6代といずれも徳川譜代の有力大名に引継がれ、260年余の幕藩体制のもと、篠山藩5万石の政治・経済・文化の拠点としてその役割を果たしてきた。

石垣は、滋賀・近江の穴太衆（あのうしょう）によるもの。自然石をあまり工夫しないで積む「野面積み」と、出角（でずみ）は「算木積み」の工法を用いている。

写真は枳形（大手門と鉄門との間にある侵入した敵軍の動きを妨げるための方形の広場）



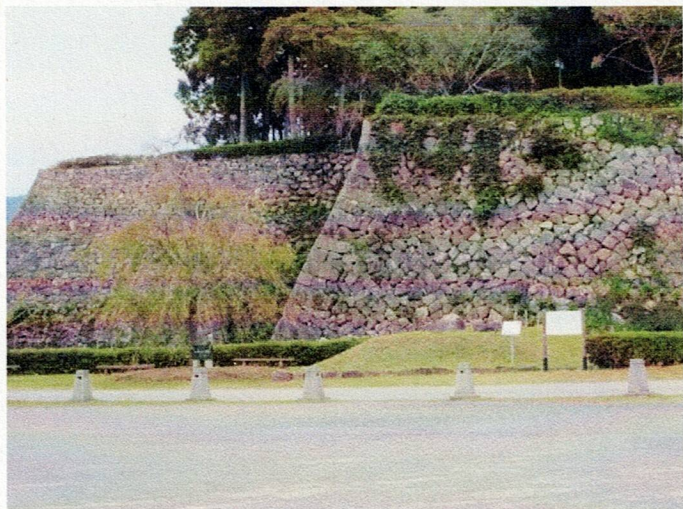
篠山城跡にて



大手門と鉄門との間枳形小口

「野面積み」と、出角は「算木積み」の工法

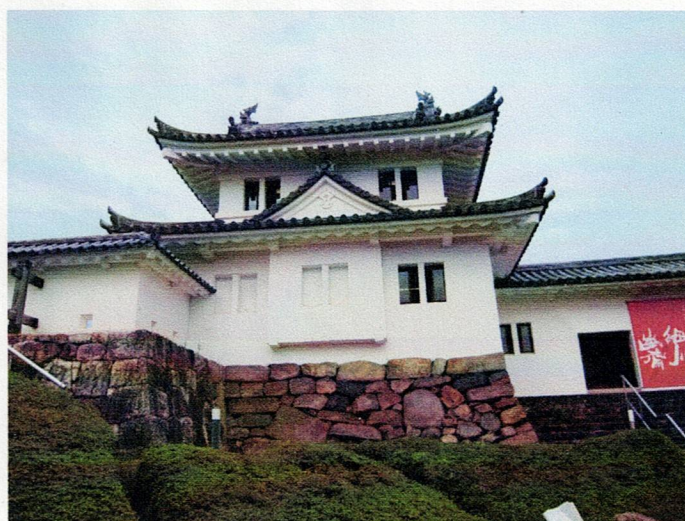
伊能忠敬が篠山の地を測量



令和5年9月26日 関ヶ原歴史を語る会第2回県外バス研修 田辺城見学

安土・桃山時代の天正8年（1580）、丹後国は細川幽斎（藤孝）、忠興親子の領国となります。細川氏は、現在の伊佐津川と高野川に囲まれた平野部に田辺城を築きました。これ以後、田辺城は細川・京極・牧野氏の居城として約290年間、領内統治の中心的存在でした。明治6年田辺城は廃城とされ、本丸付近は現在舞鶴公園となっています。また、「舞鶴」の地名は、田辺城の別称「舞鶴城」（ぶかくじょう）に由来しています。現在は、歴史資料館として、細川幽斎を中心とした歴代城主や、城下町・田辺の歴史を紹介しています。また、彰古館では「糸井文庫」の錦絵資料を展示しています。

注：舞鶴市田辺城資料館から引用



丹後守護の一色氏が館を造り、1582年細川優斎が宮津から田辺に移動し築く、細川藤孝は戦国一の文化人 特に和歌に優れて古今和歌集の伝承者、戦いの時、朝廷の勅令を受け田辺尻を開城 写真が入り口大手門 と資料館になっている彰古館

細川藤孝は（幽斎）は、1534 年、京都の東山で室町幕府の重臣 三淵晴員（みぶちはるかず）の二男として誕生。実の父は、第一二代将軍足利義晴という。

幽斎は、荒々しい戦国の世に、ぬきんでた文人であり、武人でした。武家の棟梁源氏の足利將軍家の正統の血をうけ、有力な幕臣細川家のあとを継ぎ、將軍の側近として27年にわたって幕府を支えてきました。のちの15代将軍足利義昭を松永勢から救い出し、將軍の座にすえて、8年間もり立てました。

この間の中央での経験が、情勢に明るく出处進退を誤らない彼の気質を作ったのでしょう。

こののち信長・秀吉・家康に従って忠勤に励んだことこそ武家の生き方に一生懸命であったことに他なりません。

また文人としては、49歳で隠居した後、20年の長きにわたって、文芸界の第一人者として旺盛な活動を続けました。

その分野は、和歌・連歌というまでもなく、太鼓・謡曲・乱舞・禅・料理・茶道・書道・鞠・有職故実（ゆうそくこじつ）と広く才能に満ちあふれたものでした。

関ヶ原合戦の前哨戦として、石田三成方1万5千人の軍勢が田辺城を攻めました。忠興率いる主軍3千程が関ヶ原で戦い、豊後の国・杵築城では1千の兵が戦うなど、この時期細川家は4つの戦場で戦っていました。

そのため幽斎の軍勢はわずか500人程度で峰山・宮津の城を焼き払い田辺城に籠城していました。しかし幽斎は文芸界トップに立つ「古今和歌集」の秘事口伝の伝承者（古今伝授）であったため、古今伝授の廃絶を憂慮した後陽成天皇は田辺城を囲む西軍の陣に勅使を送りました。

「幽斎は古今集の秘奥を伝え帝王のご師範で、神道・歌道の国師である、速やかに囲みを解くべし」

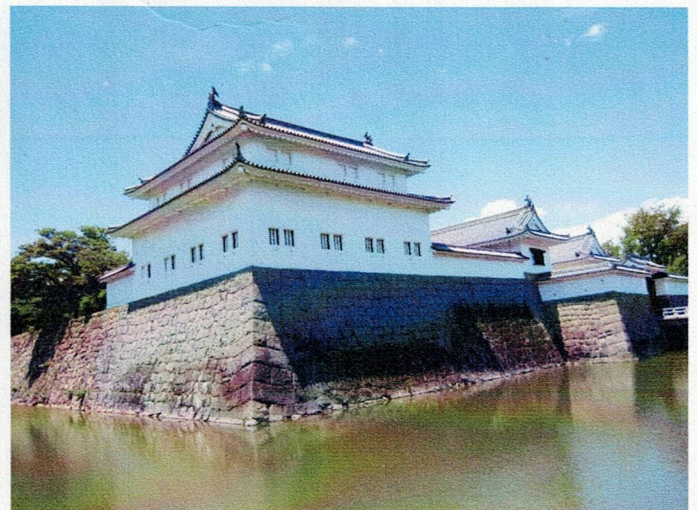
天皇の意向を知った西軍の諸将は大いに驚き、直ちに包囲が解かれたのは有名な話です。

幽斎は、わずかな手勢で52日間を小城に拠って戦い抜いたのです。

令和5年6月13日 関ヶ原歴史を語る会第1回県外バス研修 駿府城見学



駿府城の東御門 入口



異櫓は、二重三階の東隅櫓

駿府城の歴史

現在の駿府城公園周辺には駿河国の戦国大名の今川氏の館があったと考えられています。今川義元が当主の頃、竹千代（のちの徳川家康）は、駿府で暮らしました。永禄三年（一五六〇）、義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれると今川氏は衰退し、永禄十一年（一五六八）に武田信玄により駿府を追われ、翌年、戦国大名の今川氏は滅亡しました。

その後、武田氏が滅んだ後、五方国を領有する大名となった家康は、天正十三年（一五八五）に駿府城築城を開始、天正十四年（一五八六）に浜松から駿府に移ります。発掘調査では、金箔瓦と天守台が見つかっており、金箔瓦が葺かれた天守や石垣のある城だったと考えられています。天正十八年（一五九〇）、家康は江戸に移り、秀吉家臣の中村一氏が入城しました。

慶長十二年（一六〇七）、大御所となった家康は江戸から駿府に移り、全国の大名を動員した天下普請による大改修を開始しました。二ノ丸までだった城の範囲を拡張し、三重の堀がめぐる輪郭式の城として整備しました。家康の死後、天守は焼失し、設計図が残されていなかったため、その姿は謎に包まれています。幕末まで、幕府が直接管理していましたが、明治時代になると廃城となり、現在、本丸と二ノ丸の跡は、駿府城公園として整備されています。

静岡市教育委員会



駿府城全体模式図



静岡県指定天然記念物 家康手植のミカン

指定年月日 昭和二年三月十四日

徳川家康公が將軍職を退いて駿府城に隠居のおり、紀州（和歌山県）より献上された鉢植えのミカンを天守閣下の本丸に移植したものと伝えられている。
このミカンは当地の方言でホンミカンといわれており、鎌倉時代に中国から入った紀州ミカン（コミカン）の一種で、香の強い、種のある小形の実を結ぶ。静岡地方のミカンの起源を知るうえで貴重なものである。

花の時期 五月初旬
収穫の時期 十二月中旬
平成四年十二月

静岡市教育委員会
静岡県教育委員会

今年のNHK大河ドラマは「どうする家康」ですが、世に知られた家康の遺訓があります。

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし。急ぐべからず。

不自由を常と思えば不足なし。ここに望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。

堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思え。

勝つ事ばかり知りて、負くること知らざれば害その身にいたる。おのれを責めて人をせむるな。

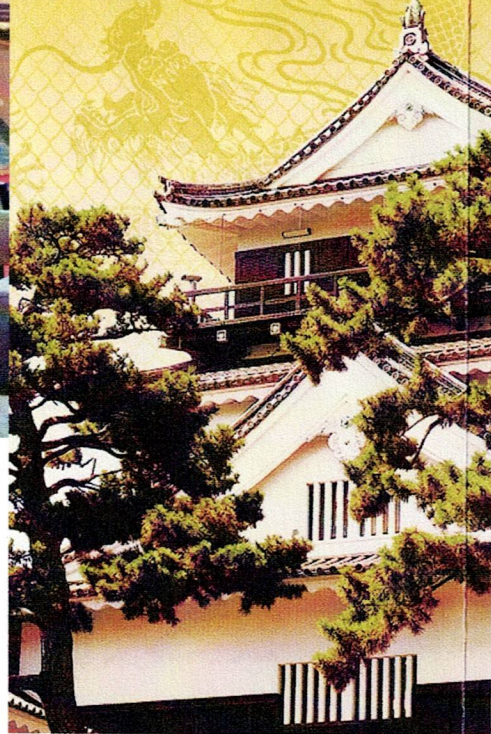
及ばざるは過ぎたるよりまされり。

徳川家康 像

神君出生の城

岡崎城

OKAZAKI CASTLE



神君出生の城

岡崎城

岡崎城の沿革

岡崎城の起源は15世紀中頃までさかのぼる。明大寺の地に西郷頼嗣(岡頼)によって築城されたのがそのじまりである。その後、享禄4年(1531)に松平清康(家康の祖父)が龍頭山と呼ばれた現在の位置に移して以来、ここが岡崎城と称されるようになった。

天文11年(1542)12月26日、徳川家康は、ここ岡崎城内で誕生した。家康は、6歳で織田信秀(信長の父)、8歳で今川義元の人質となり、少年期を他国で過ごしたが、永禄3年(1560)の桶狭間の合戦で、今川義元が戦死したことを契機に自立した。ときに19歳。以来、岡崎城を拠点に天下統一という偉業への基礎を固めた。

元龜元年(1570)、家康は本拠を遠江浜松(静岡県浜松市)に移し、嫡男信康を岡崎城主とした。天正7年(1579)に信康が自刃したあとは、重臣の石川数正、ついで本多重次を城代とした。天正18年(1590)に家康が秀吉によって関東に移されると、秀吉の家臣田中吉政が城主となり、城下町を堀で囲み総構えとした。家康が江戸に幕府を開いてからは、譜代大名にここを守らせた。

江戸時代、岡崎城は「神君出生の城」として神聖視され、本多氏(広孝系統)、水野氏、松平(松井)氏、本多氏(忠勝系統)と、家格の高い譜代大名が城主となった。石高こそ5万石前後と少なかったが、大名は岡崎城主になることを誇りにしたと伝えられる。元和3年(1617)本多康紀のときには、三層三階地下一階で、東に井戸櫓、南に附櫓をもつ複合天守に再建された。

明治維新を迎えると情勢は変わり、新しい時代には不要とされた城郭の大部分は明治6~7年(1873~74)にかけて取り壊されてしまった。

このあとは、堀と石垣が昔日の面影をわずかに伝えるばかりであったが、岡崎の象徴である天守がないままではしのびないとする市民の思いは強く、昭和34年(1959)に、ほぼ昔どりの外観の天守が復興された。いしえ、東海道を往来する旅人が覗き見たであろうその姿を、今我々も眺めることができる。

総構え



総構えとは、城郭主要部の内郭および街道で結ばれる城下町を含む外郭と合わせた城郭構造のことをいう。田中吉政は天守創建や主要地点の石垣化などの他、岡崎城に「田中堀」と呼ばれる総堀を構築した。東側は谷地形、西側は河川などを利用して整備し、北側は台地上に堀を開削して総堀とした。岡崎城の総構えは、東西約1.5km南北約1kmに及ぶ広範囲なものである。

歴代岡崎城主(城主期間)

西郷頼嗣 (頼嗣)	水野忠春	1676~1692
松平光重	水野忠盛	1692~1699
松平信貞 (西郷信貞)	水野忠之	1699~1730
松平清康	水野忠輝	1730~1737
松平弘忠	水野忠辰	1737~1752
—— 今川氏康代 ——	水野忠任	1752~1762
徳川家康	松平康福	1762~1769
松平信康	本多忠康	1769~1777
—— 徳川氏康代 ——	本多忠典	1777~1790
田中吉政	本多忠勝	1790~1821
本多康重	本多忠孝	1821~1835
本多康紀	本多忠民	1835~1869
本多忠利	本多忠直	1869~1871
本多利康	—— 鹿澤西院 ——	
水野忠善		

上は頂いたパンフレットからの印刷物

高校の同級生と一緒に



どうする家康 岡崎 大河ドラマ館前にて

岡崎城前にて



大樹寺の本堂 厭離穢土 欣求浄土

古くは、源信（942～1017年）の『往生要集』の冒頭にこの言葉が書かれています。浄土教の根底思想です。「私たちが住むこの世界は苦悩に満ちた穢れた世であり国土であり、それを厭（いと）い離れることを願うことであり、心からよろこんで浄土に生まれることをねがい求める」



伊賀八幡宮の起源は、松平四代・親忠公が松平家（徳川家の祖）の守護神、氏の神として

八幡神（やはたのかみ・はちまんしん）を祀られたことに発します。

その後、徳川三代将軍・家光公が、祖父・家康公（東照大権現）を祀ることとされ、現在は八幡神、東照大権現をお祀りする社となりました。

親忠公は、伊賀八幡宮創建の五年後に、代々のお墓を移し、菩提寺として大樹寺を創建。また合戦の際の旗印に「厭離穢土欣求浄土」を初めて掲げられ、この事績は徳川家康公にも引き継がれた。



滝山東照宮（たきさん とうし
ようぐう）は、愛知県岡崎市滝町
にある神社（東照宮）。日光、久能
山と並ぶ日本三大東照宮の一つ
とされることがある。

正保元年(1644年)10月18日、
第3代将軍の徳川家光は、酒井忠
勝、阿部忠秋、阿部重次を召して、
大樹寺に東照宮を造営するよう
命じた。11月初め、松平正綱と大
工頭の木原義久が土地点検のため
岡崎に遣わされるが、結局、東
照宮は大樹寺内には造営されず、
滝山寺に造営されることとなっ
た。正保2年(1645年)5月13日、
竹中左京亮重常が造営奉行に任
ぜられて工事が始まった。正保3
年(1646年)8月に完成。

令和4年12月7日 関ヶ原歴史を語る会第3回県外バス研修 小牧・長久手の戦い



令和5年NHK大河ドラマ

「どうする家康」の先取り学習で
小牧・長久手の戦い場所に行ってきま
した。

小牧市

小牧城 標高85m 家康本陣
頂上は歴史博物館

長久手市

古戦場公園・郷土資料館
池田恒興・元助、森長可戦死の碑

小牧・長久手の戦い

発端

天正10年(1582)6月、織田信長が家臣の明智光秀の手にかかり、本能寺で討たれた。そのとき、信長の三男信孝を大将に、光秀討伐軍を指揮したのが、羽柴(後の豊臣)秀吉である。秀吉は、信長の後継者を決める清洲会議からしばらくすると、柴田勝家と対立し、天正11年賤ヶ岳の戦いで破った。こうした中で、信長の二男信雄は、当初は秀吉と友好関係をもったものの、信孝が秀吉に岐阜城を追われ自害した後からは警戒心をもつようになった。信長の後継者の立場を事実上確立した秀吉に対し、不満を感じる信雄は、織田家の同盟者であった徳川家康に助けを求めた。家康は、いつかは秀吉と対決しなければならないと考えていたので、これに応じた。天正12年3月6日、信雄が秀吉に内通していた三人の家老を殺害したことで、「小牧・長久手の戦い」は始まった。

主戦場は尾張に

秀吉そして家康・信雄の両者とも、当面は伊勢国、特に信雄の本拠長島城(三重県桑名市)のある北伊勢を戦闘場所と想定していた。しかし、家康・信雄の予想に反し、美濃国大垣城主・池田恒興(勝入)と美濃国金山城主・森長可が犬山城(愛知県犬山市)を攻撃、落城させた。慌てた家康は、池田・森の侵攻を防ぐため、自軍の一部を北伊勢から北尾張へ急速転戦。3月17日、羽黒(犬山市)まで陣を進めてきた森軍を、家康の部将酒井忠次らが敗って、形勢を立て直した(羽黒の戦い)。一方、北伊勢では秀吉軍への守りが不足し、信雄領伊勢国の南半分は、ほぼ壊滅状態となる。

羽黒で敗戦したものの、敵地犬山に拠点をもつことに成功した秀吉は、桑田(犬山市)へ着陣、周辺に砦を築いた。桑田から南方約4.5kmの小牧山(愛知県小牧市)に家康も陣を移し、近辺に砦を作った。信雄も長島から小牧山に移

った。両者の当初の思惑に反し、主戦場は尾張国内へ移り、お互いが出方をうかがうという状況になる。

また、諸国へもこの戦いの様相が伝えられ、両将からの呼びかけに呼応し合戦に至った地域もある。秀吉方、織田・徳川方のどちらにつくか。この戦いは日本中へ大きな影響をおよぼした。

岡崎進軍

4月に入り、膠着状態を破って秀吉軍は岡崎進攻のための別働隊を進めた。史記類をもとにした通説では、この作戦の発案者は池田恒興で、「家康配下のほとんどの部隊は小牧山にいる。今、家康の本拠地岡崎を突けば、家康軍に乱れが生じ、そこを突けば勝利できる」と提案。最初はこの案に賛成しなかった秀吉も、恒興の熱心さに押され、ついに承諾したとされる。しかし近年の研究で、事前の普請(工事)、行軍の規模、ゆっくりとした移動日程などから、この作戦は隠密行動というより、計画的で大がかりなものであったことがわかってきた。秀吉はこの案に主体的に介入し自信をもっていたと思われるが、結果的にはこの作戦の失敗は秀吉の汚点となった。そのため「太閤記」では秀吉が恒興の案を「仕方なく受け入れた」と記され、後の史記がそれに従ったと考えられる。

4月6日夜半、①池田恒興・元助の父子、森 長可 ②堀 秀政、長谷川秀一 ③秀吉の甥で総大将の三好信吉(後の豊臣秀次)の順で、約24,000人の軍勢が岡崎へ向けて進軍を始めた。

岩崎城の落城

家康は、7日遅くとも8日には秀吉方の岡崎進攻隊の動きを把握、8日夜には自身が小幡城(名古屋市守山区)へ進んだ。岩崎城主・丹羽助助氏次を道案内役とした榊原康政ら4,500人の先発隊と、9,300人の本隊が秀吉方を追撃に向かった。

4月9日早朝、岡崎進攻隊の先鋒池田隊は、岩崎城(日進市)のそばを通りかかった。恒興は岡崎への道を急ぐため、この家康方の城を攻めずに通過しようとしたが、岩崎城を守っていた氏次

の弟、丹羽氏重らが、鉄砲を撃ちかけてきたため、これを攻め落としてしまった。この城には城主氏次の姉婿で、長久手城主の加藤太郎右衛門忠景も留守番に来ており、200余りの城兵とともに戦死した。忠景41歳、氏重16歳であった。なお長久手城址は、現在、市指定史跡となっている。

白山林の戦い ～家康軍の急襲～

秀吉の甥で、当時わずか17歳の三好信吉が指揮する秀吉方の最後尾は、4月9日早朝、白山林（尾張旭市）で朝食をとっていた。そこへ徳川軍の先発隊が背後から急襲。不意を突かれた三好隊は、あわてて防戦に努めたが、ついに総崩れとなった。大將信吉は細ヶ根（長久手市荒田／地下鉄車庫北東）付近まで逃げたが、自分の馬も見失って、討死寸前まで追い込まれた。そこへ信吉の部将の木下勘解由利匡が、自分の馬を信吉にさし出して逃し、兄弟の木下助左衛門祐久とともに、追ってきた徳川軍と戦って戦死した。なお木下一族の家は現在も荒田に残っており、勘解由利匡の家が、市指定史跡になっている。

松ヶ根の戦い ～秀吉軍 唯一の勝ち戦～

三好隊の敗走を知った秀吉方の第2隊の堀秀政は、ただちに松ヶ根（長久手市坊の後／中央図書館付近）の丘陵上に陣を構えた。まもなく白山林で勝利した徳川勢が突進してきた。地の利を得た堀勢は、接近した敵に鉄砲のつるべ打ちをあびせた。隊列を乱した徳川勢に向けて、秀政は総攻撃を命令。堀勢の鋭い攻撃に徳川の先発隊は、多数の死者を出し、大打撃を受けた。しかしこのとき、秀政はすでに家康の本隊が東方に進出しているのを知った。深追い是不利と判断した秀政は、急いで自軍をまとめて、北方へ引き上げていった。

松ヶ根の決戦

4月9日の朝、色金山（長久手市岩作色金／色金山歴史公園）周辺に着いた家康の本隊は、続々と香流川を渡って、午前10時ごろ富士ヶ根（長久手市富士浦）から松ヶ根（長久手市武蔵塚の北部）、前山（長久手市城屋敷の東部）に陣を構えた。一方、岩崎城を落とした池田恒興のもとへ、信吉大敗の報告がもたらされ

た。恒興は急いで馬首を返し、すでに布陣を終えた徳川軍に対し、恒興は自分の長男元助を右翼に、娘婿の森長可を左翼に配した。両軍は激しく戦ったが、勝敗はなかなか決しなかった。しかし昼ごろ家康の本営に突進した長可が、井伊隊の銃弾を頭に受けて戦死（享年27歳）したため、戦いは徳川軍が優勢になった。戦闘の終焉は、午後1時であった。池田恒興は永井直勝に、子の元助は安藤直次に討たれた。恒興49歳、元助26歳であった。池田父子の塚は、現在も市指定史跡として古戦場公園内に残る。

和睦

長久手の戦いで勝利をおさめた家康は、ただちに小幡城を経て小牧山に戻った。一方秀吉は4月9日昼ごろ、桑田の本営で岡崎侵攻隊の敗戦を知り、すぐに大軍を率いて救援に向かった。しかし、ときすでに遅く、龍泉寺まで進んだものの、そのころには家康は小幡城まで兵を引いた後であった。翌10日には、家康はすでに小牧城まで戻っており、秀吉軍は、なすすべもなく桑田にひき返した。その後、両軍は小牧・桑田周辺で小競り合いをしていたが、4月下旬に秀吉が美濃国鷺沼（岐阜県）に移動すると戦闘地域も尾張西部へ移った。5月に加賀野井城・竹鼻城（岐阜県羽島市）、6月に蟹江城（愛知県海部郡蟹江町）で局地戦があったが、11月になると、桑名から長島方面へ攻撃した秀吉と、長島城にこもる信雄が単独で和睦したため、大義名分を失った家康も兵を引き、約8か月間にわたった「小牧・長久手の戦い」は、幕を閉じた。

この戦いで、信雄は伊勢国の大半と伊賀国を秀吉にわたし、事実上の敗北。秀吉は、旧信長家臣団を自身へ臣従させ支配体制を再編成、翌年には関白となり全国統一を推し進めていく。家康は、結果的に秀吉に臣従したが、その実力を全国の大名に認識させ、秀吉政権下でも別格の地位を保ち、徳川政権樹立の足がかりを固めていった。

日進市 岩崎城

戦国時代の岩崎城は、丹羽氏のお城でした。丹羽の家は戦国時代の日に進で力を持っていた武将で、岩崎城のまわりにいくつも城を持っていました。岩崎城をふくめた丹羽氏の領地は、尾張の国に領地を持つ織田氏と三河の国に領地を持つ徳川氏の間にはさまれていました。4代目城主の丹羽氏次は織田信長に仕えていましたが、信長は本能寺の変で死んでしまいます。信長が死んだあと、氏重は信長の次男・織田信雄に仕えました。

信長が死んだ後、織田家では跡継ぎを誰にするかの争いが起こります。織田信長の息子・織田信雄は信長の後を継ぎたいと考えましたが、信長の家臣・羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)は信長の孫に跡を継がせるのがよいと主張しました。秀吉の言うことに不満を持った織田信雄は徳川家康をたより、跡継ぎ争いは秀吉対信雄・家康の対立と発展しました。



小牧長久手の戦い

秀吉と信雄・家康の対立はおさまらず、天正 12(1584)年、ついに合戦が起こってしまいました。この合戦は今では「小牧長久手の戦い」と呼ばれています。秀吉は現在の犬山市楽田に、家康は小牧市にある小牧山に陣を構えました。それぞれの陣で相手の出方をうかがってにらみ合いの状態となった両者は、どちらも動けなくなってしまいました。

三河中入り作戦

この状況をどうにか変えようとした秀吉軍の武将、池田恒興は「三河中入り」という作戦を考えます。この作戦は、小牧にいる家康軍に見つからないように移動して、家康の本拠地・岡崎城へと攻め込みました。本拠地を攻めれば家康は小牧から岡崎へ帰らなければならず、家康軍の戦力がばらばらになり、秀吉軍に有利だと考えたのです。

これはとてもむずかしい作戦でしたが、恒興のつよい希望で実行することが決まりました。

4月6日の深夜、恒興の隊を先頭にした作戦部隊が秀吉軍の陣地・犬山から岡崎へ向かって出発しました。

その、岩崎城主・氏次は小牧の家康のところへ出陣していて、岩崎城では弟の氏重が留守番をしていました。長久手を通してやってきた恒興たち作戦部隊が岩崎城の近くを通りかかったことに気が付いた氏重は、恒興たちを止めようと戦いを挑みどみました。氏重の突然の攻撃に怒った恒興は、岩崎城へ攻め込み、戦いがはじまりました。

岩崎城の戦い

戦いが始まった時、恒興隊の兵は約 7000 人、岩崎城にいた氏重たちの兵の数は約 300 人でした。氏重たちは一生懸命戦いましたが、相手の人数が多すぎて、戦いに勝つことはできませんでした。戦いの結果、氏重をふくめたたくさんの人が討ち死にして、最後には岩崎城は落城してしまいました。

恒興たちが岡崎へ向かったことを知った家康軍は、あとを追いかけて、長久手で作戦部隊の後続隊に追いつき、そこで戦いがはじまりました。

岩崎城を攻め落とした恒興たちは、後続隊（三河中入りの作戦部隊には恒興のほかにも武将が参加していて、それぞれの武将ごとに部隊を組み、順番に並んで歩いていました。たくさんの兵が動くので、列は長くのびて、恒興が岩崎城にいたころ、列の一番後ろはまだ長久手にいました。）を助けるために長久手に戻り、家康軍と戦いました。恒興たちは結局、岡崎にはたどり着くことができず、家康に負けて討ち死にしていまい、三河中入りは失敗しました。

岩崎城の氏重たちは戦いには負けてしまいましたが、岩崎城の戦いで恒興隊の足止あしどめに成功し、家康は三河中入りを止めることに間に合ったうえ、長久手の戦いに勝利することができました。

戦いのあと

家康は氏重らの活躍に助けられたことをとても喜んだといわれています。

岩崎城の城主で氏重の兄・氏次は、その後も家康のもとで活躍しました。

関ヶ原の合戦の後、丹羽家は現在の豊田市に領地を与えられ、一万石の大名となりました。丹羽家の人々が岩崎城をれたため、岩崎城は廃城になり、城としての役割を終えました。